



## 生きものに配慮した整備計画を作りました (2022年10月5日)

環境との調和に配慮した農業農村整備事業を行うため、環境情報部会を行いました。(鶴岡市井岡地区・酒田市袖浦北部地区・遊佐町野沢地区)

各地区2回ずつ実施した生きもの調査の結果から、絶滅危惧種のアホウドリやニホンアカガエルが生息しており、環境配慮として、生きものの生息地となる「よどみを設けた水路(写真)」を作る計画としました。

各環境情報部会では、環境配慮の計画、計画の実施・確認、実施後の影響観察を行います。

【取材：庄内PJA 八畝】





## 今年度で工事完了！「上堰・八カ村堰地区」(2022年10月12日)

事業採択から10年目を迎える、庄内町の「上堰・八カ村堰（うわぜき・はっかそんぜき）地区」。

世界かんがい施設遺産 北楯大堰を水源とする本地区の用水路について、県では老朽化した水路の改修を進めてきました。

総延長5,504メートルのうち、未改修区間は500メートルあまり。今年度の工事で全路線の改修が完了する予定です。

これにより、1,000ヘクタールを超える農地への用水の安定供給、農作業の省力化、大雨時の排水効果が期待されます。

【取材：庄内PJA 安食】





## 小学生が農業用調整池で自然体験学習！ (2022年10月19日)

庄内赤川土地改良区が管理する調整池で、赤川から取水された農業用水とともに入り込んだ魚などを捕獲して赤川に返す「お魚救出大作戦」が行われました。

4年生18名が参加したこの活動は、三川町立押切小学校の自然体験学習の一環で行われています。

子どもたちは、たも網を使ってびしょ濡れになりながら、30センチメートルほどもあるコイをはじめ、ウグイ、オイカワ、タモロコ、スナヤツメなどを捕まえました。

魚の種類や生態について学んだあと、「もう自由だよ。池には戻ってこないでね。」と優しく声をかけながら、丁寧に放流しました。

【取材：庄内PJA 菅野】



## 高校生が「北楯大堰」など地域を学習 (2022年10月25日)

庄内総合高校の3年生18名が、庄内町清川地区を拠点に活動している地域おこし協力隊 玉越宏さんの案内による「地域を知る学習」を行いました。

庄内総合高校では、学校がある庄内町に通学・居住していても知らないことが多いことから、地域を知るためにこの学習を行っています。

今回は世界かんがい施設遺産「北楯大堰」や、明治維新に大きな役割を果たした「清河八郎」などを対象に、9月に座学、10月に現地学習を行い、その後資料の取りまとめと発表会を行います。

当日、生徒たちは玉越さんからの質問に答えたり、わからない点を確認したり、写真を撮りながら学習していました。

北楯大堰周辺だけでも由緒ある神社やお寺がたくさんあるので、皆さんもぜひ足を運んでみませんか。

【取材：庄内PJAチーフ 佐藤(和)】





## 最上川取水トンネルの点検 (2022年11月1日)

最上川土地改良区と、県管理の農業用水トンネル点検に行ってきました。

さみだれ大堰の上流から取水するこのトンネルは、内空断面の直径が3.8メートル、総延長は3キロメートルを超えます。

昭和30年から約8年かけて県営事業で築造され、国営事業による改修を経て、約6,200ヘクタールの水田にかんがいている重要な施設です。

かんがい期間終了後、トンネル内部の点検や堆積した土砂の浚渫、ゴミの除去を行っています。

浚渫は7人で4日間もかかる大変な作業ですが、農業用水を安定して届けるために欠かせない大切な作業です。

今回の点検ではトンネルに異常はなく、あとは来春の取水を待つだけです。

【取材：庄内PJA 菅野】





## 加茂地区住民の交流まち歩き (2022年11月8日)

鶴岡市加茂地区において、幅広い世代が交流して地元の歴史や文化を知ってもらい、地域の若者・子どもが活躍する地域づくりを目的にしたまち歩きイベントに参加しました。

当日は、地域住民と東北公益文化大学生ら約110人が9グループに別れ、「北前船寄港地 加茂の歴史に触れるまち歩き」として地域内の寺社や港など10か所を巡り、各地点に隠されたキーワードを探すクイズやダーツなどを楽しみました。

歩きながら、寺院や北前船寄港地の歴史、街並みなどの話をする中で、和やかに世代間交流も図られていました。

天候にも恵まれ、もう一度ゆっくり歩いてみたいと思いつつながら帰路に着きました。

【取材：庄内PJAチーフ 佐藤(和)】





## 家根合 めだか米の稲刈り (2022年11月15日)

5月に田植えを行った家根合地区のめだか米も、ついに収穫の時を迎えました。

自分たちで植えた稲の刈り取りに、庄内町立余目第一小学校の児童もとても楽しそうでした。

稲刈りのあとは、天日干しにするための「杭掛け」にも挑戦。

苦戦しながらも一生懸命稲を運び、大人の手を借りて立派な杭掛けを完成させました。

収穫したお米は、後日子どもたちに提供される予定です。

一年の農業体験を通じ、米どころ庄内の良さを体験する貴重な経験になったのではないのでしょうか。

【取材：庄内PJA 渡辺】





(第751回)

## 地域外の農的關係人口を拡大する 月山高原秋の収穫祭 (2022年11月22日)

鶴岡市羽黒地域の月山ろく環境保全会（事務局 株式会社アイデア）が、月山高原の畑作団地で「秋の収穫祭」を行いました。

親子でサツマイモと里芋を収穫するイベントに、市内外から59人の申し込みがありました。

当日はあいにくの雨でしたが、子ども達は力を込めて「ヨイショ！ヨイショ！」と大きな芋を掘り起こして大喜びでした。

毎年参加しているという常連さんは、「とても楽しいです」「来年も来ます」と言って収穫祭を楽しんでいました。

【取材：庄内PJA 北川】





## 若手技術者の交流 (2022年12月1日)

鶴岡市内で農地整備事業を担当している土地改良区や市、庄内総合支庁の若手職員などを対象とした研修会が開催されました。

研修は36名が参加し、現場視察と意見交換会の2部構成で行われました。

現場視察では、水田のフル整備（ほ場の区画拡大や用排水路の管路化）と部分整備（用水路の管路化）を実施中のそれぞれの現場で工事内容の説明があり、その後の意見交換会では、普段聞けないことや日頃の業務で疑問に思っていることなどについての質疑応答が行われ、大変有意義なものになりました。

関係者の良好なコミュニケーションがより事業を円滑化し、工事の早期完成に結び付くことを期待します。

【取材：庄内PJAチーフ 佐藤(和)】



## 農地地すべり防止区域の点検 (2022年12月6日)

鶴岡市に点在する6つの農地地すべり防止区域において、地すべり防止施設の点検を行いました。

この施設は県が管理しており、毎年降雪前に、施設の異常がないかの点検と維持管理作業を行っています。

現場では、地下水の上昇を抑制するために設置した横ボーリング工で排水不良となっている管の中にケーブルを挿入して洗浄したり、地表水を排除するための排水路に堆積した土砂や落ち葉を撤去したりして、施設の機能を回復させました。

山形県では地すべりの監視と施設の維持管理を実施し、国土の保全と地域の安心安全を図っています。

【取材：庄内PJA 遠田】





## 農業水利施設の維持管理～機能診断調査～ (2022年12月14日)

新浜広揚水機場のポンプ設備の機能診断調査（点検）を実施しました。

一級河川 大山川を水源とするこの揚水機場は、約205ヘクタールの農地に用水を供給する重要な施設で、口径450ミリメートルのポンプ2台、200ミリメートルのポンプ1台を備えています。

今回の調査ではポンプの上蓋を開けて、内部の劣化具合や消耗品の摩耗状況などを確認しました。

農業水利施設は、長寿命化とライフサイクルコストの低減を図るために、日常点検や施設の機能診断調査・評価、計画策定、対策工事、データの蓄積からなるストックマネジメントサイクルを繰り返すことで計画的な維持管理を行っています。

今回の調査結果についても、施設の計画的な維持管理に向けてデータの蓄積を行っていきます。

【取材：庄内PJA 安食】



## かんがい施設の歴史～天保堰～ (2022年12月21日)

庄内には、庄内平野を開田するために水を求めて苦勞した先人の言い伝えが各所に残されています。

今回は、鶴岡市にある**天保堰**（てんぼうぜき）を紹介します。

1832年（天保3年）、藩命を受けた大館藤兵衛元貞（おおだてとうべえもとさだ）は、旧榊引町黒川地区の開田事業に着手しました。

元貞は最初に田沢川から取水する堰をつくりましたが、田沢川は水量が少なく、十分な水が得られませんでした。

そこで新たな水源を求めて月山山中を探しまわり、苦難の末、流域の異なる田麦川水系 金剛山川から導水することにしました。

1837年（天保8年）6月に着手した工事は、象の倉と呼ばれる巨大な岩山にトンネルを掘るという前代未聞の難工事でしたが、毎日1000人にも及ぶ人夫を動員し、わずか2カ月で延長9.9キロメートルの用水路が完成しました。

この功績により名字帯刀を許され、大堰守・大組頭格に任じられた元貞は、現在も庄内赤川土地改良区の祭神として崇められています。

天保堰は、その後の県営事業によって取水口の改修やトンネル工事が行われ、185年たった今も大切に使われています。

湧水期には、庄内赤川土地改良区の職員が取水口にたまった石や流木を手作業で取り出す維持管理作業を毎年行っています。

過去から現在にわたって、庄内平野の水田はたくさんの人の尽力によって支えられています。

【取材：庄内PJA 渡辺】





## ほ場整備事業「畑地区」工事報告 (2023年1月4日)

2022年5月26日(木曜日)にはほ場整備事業の起工式を行った、遊佐町畑地区の工事の進捗状況をお知らせします。

今年度は夏場の長雨により、工事の工程に若干の遅れが生じたものの、完成に向けて着々と工事が進められてきました。

用水路、排水路、調整池の工事はすでに完了しており、12月末時点の進捗率は約90パーセントです。

残すは、雪解けを待っての整地工の仕上げと道路工の一部のみ。3月の完成が待たれます。

下の写真は、約165メートル×35メートルの大区画に整備された水田と、口径150、200ミリメートルの農業用パイプライン(用水路)の布設状況です。

引き続き、関係者や地元の方々のご理解とご協力を得ながら工事を進めていきます。

【取材：庄内PJA 安食】







## 農民の悲願であった因幡堰の開削 (2023年1月18日)

今から約400年前、当時の鶴岡市藤島は、合戦や一揆により形を留めないほど農地が荒廃していました。

そこに山形城主 最上義光が配置した藤島城主の新関因幡守久正（にいぜきいなばのかみひさまさ）は、復興と新田開発を行うため、1607（慶長12）年に農民の長い間の願いであった赤川からの用水溝開削工事に着手しました。

しかし、工事は計画どおりに進まず長い中断を経て、1685（貞享2）年の大干ばつを機に1689（元禄2）年、庄内藩主 酒井忠真（さかいただざね）から許可が下り、藤島古郡の大庄屋 田澤基左衛門が工事を再開し、藤島までの堰が完成しました。

その後も改修工事が繰り返され、1964（昭和39）年に着工された国営赤川農業水利事業により、因幡堰を含む8カ所の取入口を1カ所に統合した赤川頭首工が完成し、因幡堰は東2号幹線用水路として、延長10キロメートル、受益面積約1380ヘクタールに用水を供給する重要な水路となっています。

【取材：庄内PJAチーフ佐藤（和）】

1925年(大正14年)



1925年(大正14年)



2004年(平成16年)



2004年(平成16年)





## 農村地域づくり活動を支える 若手・女性等事務担当者の育成 (2023年1月25日)

酒田市成興野(なりこうや)地域資源保全会(代表 五十嵐登さん)は、多面的機能支払交付金を利用し、農道や水路の保全活動、集落周辺の景観形成活動(クリーン作戦)や田んぼダムを取組を行っています。

これらの農村地域づくり活動を継続するため、新たに、若手農業者の荘司光善(ひろよし)さんが保全会の監査役(役員)に就任しました。

18ヘクタールの水田を耕作する荘司さんは、農業に対して真面目で、分からないことがある時は集落のベテランや先輩たちに聞く力のある若者です。

県多面的支払推進協議会が開催した、若手・女性等事務担当者の育成研修会に参加してスキルアップしました。

現在は、地域住民の直営施工による活動を支援するため、重機の免許取得を目指しています。

親子ほどの年齢差がある、代表の五十嵐登さんや書記の今井一博さんらと一緒に、保全会の地域づくり活動を続けていきます。

【取材：庄内PJA 北川】





## 400年の時を超え水田農業をささえる 大町堰 (2023年2月1日)

大町堰（おおまちぜき）は、戦国時代末期に造られた農業用水路で、酒田・飽海地域の代表的な歴史的水利施設です。

嘉永5年（1852年）に大町溝に呼称を変え、400年の時を経た現在でも、主要施設として地域の水田農業をささえています。

当時の大町堰は、相沢川と田沢川の合流点下流の右岸に取水口があり、相沢川右岸の山麓を通過して、酒田市平田地区の山谷、山谷新田、檜橋、堀野内を経て、市内の本川、熊手島、大町を通過して東禅寺城（亀ヶ崎城）外堀に注ぐ、全長16キロメートルでありました。

水路工事は、天正19年（1591年）から慶長元年（1596年）までの間に、上杉景勝の家臣で東禅寺城城主の甘糟備後守景継（あまかすびんごのかみかげつぐ）が山谷堤（現在の泉谷地池）の築造とともに起こったといわれています。

工事完成により、水不足が解消し新田開発が進んだとされており、水路を管理する大町溝土地改良区では、土地改良の原点とも言うべきこの偉業を称え、毎年大町溝記念祭を斎行し、後世に伝えています。

【取材：庄内PJAリーダー 足達】



大町溝概念図

[をクリックして拡大 \(PDF: 160KB\)](#)



甘糟備後守景継武者姿図 (宮城県柴田郡大河原町 甘糟元氏所蔵)



(第761回)

## 大盛況！やまがたの棚田カレーin山形大学農学部 (2023年2月8日)

県では、棚田米の消費拡大と棚田地域の振興のため、「やまがたの棚田カレー」の取組みを支援しています。

1月下旬、庄内地域で初開催となった、山形大学農学部との連携企画の結果をお知らせします。

この企画は、本県職員が講師を務めた農学部の講義において、棚田への理解を深めた学生から「棚田米の消費拡大のため、庄内でも棚田カレーが食べたい」という声が多く寄せられたことがきっかけで始まったものです。

今回は3日間のみで開催でしたが、多くの方に足を運んでいただき、198食を提供することができました。

棚田カレーを食べた方からは「お米がおいしい」「アイデアが面白い」といった感想を、棚田米生産者の方からは「自分が育てたお米が美味しいといってもらえて嬉しい」という声をいただいています。

そして現在、鶴岡市で棚田カレーの提供に向けた検討を進めています。

提供が決まり次第、ホームページやFacebookでお知らせしますので、続報をお待ちください。

【取材：庄内PJA 池田】





## 渡り鳥が越冬する農業用ため池 (2023年2月15日)

鶴岡市西郷地域の藩政時代から明治における農業水利事情は、地域を流れる大山川の水位が低く灌漑用水に利用することができなかつたため、砂丘からの湧水を貯めたため池が最大の用水源であり、そのほか大山川対岸の集落からの捨水を掛樋にて利用するなど、先人達は水不足に並々ならぬ苦勞を強いられていました。

このような中、西郷地域の下川村では、高橋山を背にしたため池（下池）を慶長（1596～1615）から元和（1615～1624）にかけ築堤し、用水として利用してきました。

大正昭和になると揚水機が次々と設置され、大山川からの取水が可能となり、水不足の解消に取り組みましたが、下池は引き続き貴重な用水源として現在も利用されています。

2008年には、渡り鳥の重要な越冬、中継地であることが評価され、ラムサール条約登録湿地に指定されました。

現在は、下池の東側に広がる湿地の保全と共に、市民の重要な環境学習の場にもなっています。

【取材：庄内PJAチーフ 佐藤(和)】

1930年頃



現在





## 農村地域づくり活動の継続に向けての機運を高める意見交換会 (2023年2月22日)

庄内町は、多面的機能支払交付金による農村地域づくり活動に取り組む組織が、今後とも安定して活動を継続していくための課題を確認するため、JAあまらめ管内の19組織を対象として意見交換会（ワークショップ）を開催しました。

町内の活動組織は、高齢化の進行と農業者の減少、そして役員の後継者不足などの諸課題を抱えており、活動を継続することが困難であると感じている組織があります。

JAあまらめ3階ホールで開催したワークショップでは、日頃の活動で感じている「課題」や「問題点」を書き出し、班の中で共有・整理して、その解決方法を考えるという手法で進め、最後に班ごとに発表しました。

「普段の会合ではどうしても発言者が偏るが、この手法なら様々な意見を引き出すことができる」「いろいろ溜まっていたものを吐き出すことができた」と、それぞれが「活動を継続するための意見」を出して、意見交換会は白熱しました。

【取材：庄内PJA 北川】





## 戦時下での上野堰隧道の開削 (2023年3月1日)

鶴岡市羽黒町に位置する上野堰隧道(うわのぜきずいどう)は、地域住民の防災上の観点と農業用水を確保するため開削されたトンネルです。

74年前の上野堰は、今野川の支川である爪田川から取水する約3.5キロメートルの懸崖水路でありました。

その路線には、防災上の観点から多くの分水場が設置してあったため、農業用水が散逸し末端まで行き届かない状況でした。

このような中、太平洋戦争中の1943年(昭和18年)に干ばつに見舞われ、被害面積は7割に及び、収量は平年の3割という極めて悲惨なものでした。

そこで、地域住民は隧道の開削を山形県へ陳情し、同年に着工となりました。

工事は、戦時下の人夫・物資不足や礫層への対応などにより予想以上に長引きましたが、多くの苦難を克服し、1949年(昭和24年)に竣工を迎えました。

その後、素掘で築造された隧道の老朽化が進み、崩落や漏水が発生し危険な状況になったため、1996年(平成8年)から県営ため池等整備事業で隧道のコンクリート巻立工事が行われました。

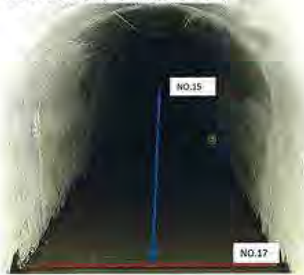
現在も、240ヘクタールの水田に農業用水を安定的に供給する基幹的農業用水利施設です。

【取材：庄内PJAチーフ 佐藤(和)】

1949年(昭和24年)



2018年(平成30年)



## 農村地域づくり活動を支える 若手・女性等事務担当者の育成 2 (2023年3月8日)

庄内町科沢(しなざわ)保全会(代表 加藤敬さん)は、多面的機能支払交付金を利用し、水路や農道の保全活動、植栽活動などを行っています。

昨年8月、若手農業者の加藤洸さんに白羽の矢が立ち、保全会の事務局を担当することになりました。

加藤さんは鶴岡工業高等専門学校専攻科応用化学コースを修了し、県外企業で研究開発に携わっていましたが、科沢に戻り、4年前から実家の農業を継いで28ヘクタールの水田を耕作しています。

事務局はゼロからのスタートですが、庄内町が実施した中間ヒアリングで交付金制度を分かり易く説明してもらったこと、そして県多面的推進協議会が開催した若手・女性等事務担当者の育成研修会に参加したことで、急速な成長曲線で理解を深めました。

「交付金を利用し、これまでの農村地域づくり活動を継続していきたい」「農道舗装工事を進めたい」「若者による草刈り隊の活動を支援していきたい」と話しています。

【取材：庄内PJA 北川】





## 30年前の先見の明 月光川右岸地区ほ場整備 (2023年3月15日)

農業の担い手の減少に伴い水田農業の持続的な発展のためには、収益性の向上はもとより農作業の省力化が大きな課題となっています。

30年前に行われた月光川右岸地区県営ほ場整備事業では、今でこそ主流の整備水準となった農地の大区画化や用排水路の管路化を、当時の農業土木技術を結集し実施しました。まさに先見の明があった画期的な事業となりました。

モデル水田の区画形状は長辺200メートル短辺60メートルの120アールで、用排水路は管路化され草刈りや水管理などの管理作業の軽減が図られました。

さらに、路上の随所からほ場に入出入りできる農道ターン方式を導入し、農作業の効率性と安全性の向上が図られました。

月光川土地改良区管内においては、このモデル水田の整備以降、農地の大区画化や用排水路の管路化を行う大区画ほ場整備事業が展開されております。

月光川右岸県営ほ場整備事業の先進的な取組みは、地域農業の発展に大きく貢献した整備事例として後世に語り継がれます。

【取材：庄内PJAリーダー 足達】



乗用田植機による農道ターン試験



## 自然災害に備えて～融雪状況調査～ (2023年3月22日)

春先にかけて融雪が進んでくると、農地や水路を流下する水量が増大するなどして、農地や農業用施設災害が発生しやすくなります。

庄内総合支庁では、融雪による災害に備えて農地地すべり防止指定区域の融雪状況調査を行い、積雪深や積雪密度などのデータ整理を行っています。

それらのデータは、融雪により災害が発生した際の資料の一部になります。

これからも引き続き調査を継続し、地域の安全と安心を図っていきます。

【取材：庄内PJA 遠田】

